（京都学園大学経営学部論集　第16巻 第２号　2006年12月　31頁～58頁）

論　　文

タイトルに秘められたメッセージ

――S. アンダスンの『おそらく女性が』一考察――

田　中　宏　明

要約　本稿では，『おそらく女性が』に描かれたアンダスンの人間観を探るため，工場で働く男女労働者と機械の関係に焦点を当て，彼の幸福観とはいかなるものであるのかを論究した。アンダスンが理想としたのは生命，自由そして幸福の追求が可能な世界である。この理想社会と対峙するのが機械による産業主義社会である。機械の元来の役割は人びとを過酷な労働から救済し，空想の時間を生みだし精神の健全性を保つことであった。だが，機械によって創出された機械文明は匠の技を競う機会を奪い，自尊心を喪失させ，男性労働者たちを精神的に不毛な人間へと変質させてしまった。一方，女性労働者たちは肉体的に非力であるがゆえに機械を巧みに操る術を覚え，社会進出に伴ってこれまで内に秘めていた力を表出することに成功する。女性たちは物質文明を享受して男性たちよりも精神の自由を謳歌するようになる。また，女性は生殖活動を通じて生命の誕生という幸福を追求できる存在でもある。このようにアンダスンは『おそらく女性が』において男女工場労働者を対比して描くことにより，産業主義の進展に伴い荒廃していくアメリカの精神世界の救済を女性に託したといえるのである。したがって，『おそらく女性が』というタイトルには，「おそらく女性が世界を救済する」という彼のメッセージが秘められていると結論づけることができよう。

キーワード：機械文明・女性・自由・幸福の追求

はじめに

アメリカ産業革命はイギリスから１世紀近く遅れてはじまり，綿織物工業から銑鉄産業へと本国と同様の過程を歩んだ。しかし現在のアメリカの工業発展

は自動車産業の興隆を置いて語ることはできないであろう。最近では自動車工場の新戦力として女性技能者を迎える動きが高まっている。その根底にはダイバーシティを追求する姿勢があり，年齢，国籍，性別などを問わず優秀な人材を登用しようという考え方であり，このような方針の下で女性の積極活用が進められている。機械や補助具などの文明の利器を用いることにより労働環境が改善されたことも女性労働者が増加した要因である。また，女性技能者は単に労働力を補うものではなく，細やかな視線で作業の無駄を見つけ，彼女たちの提案が業務改善の源にもなっている。このように現代の工場では女性が必要不可欠な労働力となっているが，1930年代前半に女性労働者と機械の関係を真正面から見据え，女性の可能性を追求した作家はさほど多くない。そのひとりが本稿で取り上げるシャーウッド・アンダスン（Sherwood Anderson, 1876-1941）である。

彼は『おそらく女性が』（*Perhaps Women,* 1931）において，機械と男女の在り方に注目して女性の可能性を追求している。機械文明の中で男たちが精神的に堕落した一方で女性たちは労働を享受し，たくましく生きていこうとするのである。

本稿では，『おそらく女性が』におけるアンダスンの人間観を探り，人間の幸福とはなにかをより掘り下げて検討したい。ひとりひとりの幸福感はもちろん主観的な要素を多く含むが，客観的要素も存在するはずである。物質的な発展こそが幸福をもたらすものであるという当時の考え方に対するアンダスンの反論を精査することは，多様な機械に支えられた産業主義文明の時代に生きる現代人にとっても重要なことである。彼の執筆活動はアメリカ経済のバブル期である1920年代から大恐慌後の30年代前半を中心としており，同様の経験を経た我が国にとっても，その時代に人びとの価値観がいかに変容したかを知ることは大切なことであろう。

1. アンダスンの作品と機械文明

アンダスンが『ワインズバーグ物語』（*Winesburug, Ohio,* 1919）を執筆したのはT型フォードの生産が始まった時期である。しかし，この作品や『行進する人びと』（*Marching Men,* 1920）では工業化が始まる以前の時代に作品のシチュエーションを設定し，手工業時代から機械文明へと移行する過程で，新たな価値観になじめない人びとの苦悩と孤独，人間の尊厳の喪失を描いた。ただし，『ワインズバーグ物語』の「神性」（"Godliness"）において，「最近の自動車の登場を伴う工業化の到来が，現代のアメリカ中西部の人びとの生活やものの考え方に多大な影響を与えた[1)]」と述べて，すでにこの当時にアンダスンは工業化に伴う人びとの価値観の変質に強い関心を抱いていたことが分かる。

中期の作品である『黒い笑い』（*Dark, Laughter,* 1925）では，人間と機械の関係，すなわち人間を中心に据えたものの考え方と，便利さと効率を追求する機械文明の関係が探求されている。そして後期の作品である『おそらく女性が』や『キット・ブランドン』（*Kit Brandon,* 1936）では，アメリカ産業主義社会に生きる人びとの姿，とりわけ女性の生き方が描かれている。現代文明のシンボルとしての機械や自動車を自在に操る女性たちの姿には，産業主義文明によって機械の前で無力となり，人間の尊厳をも失ってしまった男性たちの姿との対比を垣間見ることもできるのである。

---

1) It will perhaps be somewhat difficult for the men and women of a later day to understand Jesse Bentley. In the last fifty years a vast change has taken place in the lives of our people. A revolution has in fact taken place. The coming of industrialism, attended by all the roar and rattle of affairs, the shrill cries of millions of new voices that have come among us from over seas, the going and coming of trains, the growth of cities, the building of interurban car lines that weave in and out of towns and past farmhouses, and now in these later days the coming of the automobiles has worked a tremendous change in the lives and in the habits of thought of our people of Mid-America. (*Winesburg, Ohio,* p. 65 in Kichinosuke Ohashi (ed.) *The Complete Works of Sherwood Anderson III..*)

実際の小説作品において人間と自動車の関係が扱われているのは『キッド・ブランドン』である。『黒い笑い』においても馬車から自動車へと時代が移っていることが示され，『おそらく女性が』では機械によって支配された工場の姿が描かれ，その後の作品である『キッド・ブランドン』で最終的な結論が述べられている。したがって，機械文明と人間の在り方いう視点に立てば，この三作品には強い関連があるといえよう。

アンダスンが産業主義社会と本格的に向き合う契機となったのは，フィッツ・ジェラルド（Francis Scott Fitzgerald, 1896-1940）が『グレート・ギャッツビー』（*Great Gatsby,* 1925）において成功者たちの華やかなニューヨークでの生活を描いて文壇に登場したことや，ドライサー（Theodore Dreiser, 1871-1945）が『アメリカの悲劇』（*American Tragedy,* 1925）において産業主義社会におけるアメリカン・ドリームを追求したことなど，当時のアメリカ文壇の潮流があったことも事実である。また，工場労働者の職場環境の悪化や1929年に起こった世界恐慌を境に労働争議などの社会問題が浮上し，一般大衆が共産主義へ傾倒していったこともこのような作品を生み出す背景にあったのかもしれない。

アンダスンは『ワインズバーグ物語』において保守的な世界から精神の自由を求めて冒険にでるジョージ少年を支える母親（Elizabeth Willard）を描き，短篇小説である『馬と人間』（*Horses and Men,* 1923）の中に収められた「女になった男」（'A Man Who Became a Woman'）では神の教えによって精神を浄化されるプロセスの中で女に生まれ変わることによって因習にとらわれた世界から解放される主人公を描いている[2)]。したがって彼は早い時期から女性の持つ可能性をテーマにした作品を扱い，中期の作品である『黒い笑い』において社会的成功にだけ人生の価値を見いだそうとする夫を捨て職人芸に価値を見いだし人間

2) 拙論「サラブレッドの墓場が意味するもの」京都学園大学経営学部論集第11巻第２号。

の本質を見抜いた男（Sponge Martin）と駆け落ちする女性を描くことによって女性と社会というテーマと本格的に関わりを持ち，そして『おそらく女性が』において女性と産業主義社会の関わりというモチーフが開花したといえよう。

アンダスンの作品をカテゴリーで選別すると，小説，短編集，自伝的作品，そしてエッセイという風に分けることが可能ではないであろうか。そのように考えると，『おそらく女性が』は機械文明に対するアンダスンの姿勢を示したエッセイであり，そのテーマが後に小説となって客観的な形で読者に提示されたのが『キット・ブランドン』であるといえる。『キット・ブランドン』においてアンダスンが「私」という形で直接作品の中に顔を出し，キットが「私」に話しかけるという形式で物語の不明な部分を補っていく手法は，『おそらく女性が』というエッセイにおいて工場を訪れて機械文明に侵された人びとの姿を目の当たりにした自らの体験により生み出されたものであろう。

『おそらく女性が』は11章から構成されており，女性に対する期待をタイトルに表したものが４章あり[3]，それ以外にも女性労働者を中心に描かれた章が３章ある[4]。したがってこの作品における機械文明と対峙する男女労働者の相違を明らかにすることによって，アンダスンの理想とする人間観を知り得ることになるのである。

2. 作品の執筆背景

アンダスンは1929年１月に３人目の妻であったエリザベス（Elizabeth Prall）と離婚した。理由は彼女がアンダスンの作家活動の苦労を理解できないというものであった。また前夫人テネシー（Tennessee Mitchell）の孤独死も加わって，

3）具体的には“IT IS A WOMAN'S AGE” “PERHAPS WOMEN”（２章）“WILL AMERICA HAVE TO TURN TO WOMEN?”である。
4）具体的には“LOOM DANCE” “GHOSTS” “THE CRY IN THE NIGHT”である。

その当時はほとんど著述に専念できない状態にあった。[5)]

実際アンダスンは1926年の『ター』(*Tar : A Midwest Childhood,* 1926) 以降長編小説を執筆できずにいた。7月に入り『欲望の彼方』(*Beyond Desire,* 1932) という新たな作品の執筆に取りかかるが長続きせず，自ら失敗作であると認めてしまう。その苦しみを「毎日小説を書き綴るが，毎夜その紙を破り捨てることになる[6)]」と述べている。その上，テネシーの孤独死によって苦しみ，一時は自殺を考えるまでに追い込まれる。

アメリカでは，フーバー大統領 (Herbert Hoover, 1874-1964) が「われわれアメリカ人は他のいかなる歴史上の国よりも貧困に対する最終的な勝利により近づき，貧しい家はわれわれの目の前から消えつつある[7)]」と演説した余韻も消えないうちに，1929年に世界恐慌が起こる。アンダスンはこの恐慌が発生する以前は労働者階級に同情的であったものの政治活動に参加することはなく，ジェファソン (Thomas Jefferson, 1743-1826) が主張した夜警国家的政府を支持し，団体活動に批判的であった。しかし，恐慌を境にして彼の行動は一変することとなった。

アンダスンが自殺の危機から立ち直ることができたのは，当時の経済の崩壊に目を向け，貧困に打ち負かされたアメリカの労働者たちを描くことにより人生探求へのエネルギーを回復させることができたからである。「国家的企みに

---

5) 家庭の破綻と執筆活動が思うように進まない苦しみを編集者であるリバライト (Horace Liveright) 宛の手紙で次のように述べている。I haven't tried to touch the novel yet and won't until I get a bit more clear at Marion. I have to get Bob broken in to run the papers and must get over the shock of my domestic breakup. That takes time. You do not break a relationship so easily—as you know. I hope to come to New York and settle down for a month's work about the middle of March. Also I hope to get the house sold and the way clear financially.... (Sherwood Anderson, *Letters of Sherwood Anderson,* p. 200.)

6) In this mood, as you may guess, my work does not progress much. I write every day and tear up at night. in *Ibid.,* p. 201.

7) "We in America today are nearer to the final triumph over poverty than ever before in the history of any land. The poorhouse is vanishing from among us."

敗北したアメリカ国民に，自らのうちに秘めてきたものを明らかにすることに人生を捧げる[8]」と語って，労働者たちの生活を描く意義を述べている。これまでアメリカの作家たちが機械の生み出す問題に関心を示さなかったことに疑問を抱き，機械文明や機械に縛られた労働者たちに焦点を当てて小説を著そうと考えたのである。多くの工場を訪れて，女性労働者の数が急速に増えつつあり，男性労働者たちよりもはるかに機械に適応していることに気づくのである。

アンダスンは男性労働者と女性労働者の違いについて，1930年3月に工場視察を終えたあとに次のように述べている。

It would be very interesting if we had come into a time when the dominant fact in life is the inadequacy of men and the strength of women. Of course it must be obvious to you that women spend the money men make and how sensible of them. Men are willing to give them the money, hoping thus to blind them to the fact that they cannot give them what women really want. And I do not mean sex except as sex symbolizes something else. Men have all along been more interested in sex than women are. Women do want love of course but what modern man has that to give. Women obviously know they (the men) haven't it to give. That is what makes them so contemptuous.[9]

アンダスンが男性よりも女性に惹かれたのは，女性が生まれながらに持っている精神的強靱さと，女性に与える本質的な愛情を持っていない男性への失望からであった。同時に家族を支えるために過酷な生活を強いられた母親の姿を

8) "I ought to give what is in me, for the rest of my life, to my own people. That means workers, defeated by Modern America, by the American scheme." Sherwood Anderson, *Perhaps Women*, p. 269.

9) Sherwood Anderson, *Letters of Sherwood Anderson*, p. 217.

女性労働者に重ね合わせることにより，彼女たちの境遇を改善しなければならないという使命感を抱いたことにも起因しているのである。

そのような状況の中で，1930年夏に再び新たな恋を見つける。それは生涯の妻となるエレナ（Eleanor Copenhaver）との出会いであった。リッチモンド大学を卒業後ブライアン・マウア大学院に在籍していたエレナに惹かれたのであった[10]。彼女は1933年にコロンビア大学で政治経済学（political economy）修士号を取った才女で，サンフランシスコにおける女性の労働状況に関する研究を行っており[11]，アンダスンとの結婚後もこの研究を続けていた。アンダスンと初めて出会ったのが1928年であるとエレナは明言している[12]。したがって，1931年に出版された『おそらく女性が』において，アンダスンが工場で機械労働に携わる女性に関心を抱きその存在に希望を託した背景には，エレナによる女性労働者に関する研究も大いに影響を及ぼしていたと考えられるのである。

そのような状況にあって，たまたま訪れたバージニア州ダンビル（Danville）で労働争議と遭遇して労働者たちを励ます演説を行い，いままで全く関心を抱いていなかった政治問題に興味を持ちはじめることとなった。彼は現実主義より理想主義を掲げて，労働者には機械を自在に操る可能性があり，すべての労働者が団結することが大切であると演説する。ダンビルのストライキは労働者側の敗北に終わったが，その後アメリカ全土で労働者階級と資本家たちの闘争が激しさを増すことになった。

また，1930年代初頭には不況が深刻さを増し失業者が増大するにつれて，共産主義に賛同する人びとの数が急速に増えつつあった。カール・マルクス（Karl Marx, 1818-1883）が資本主義の崩壊を予言する賢明な人物としてもては

10） アンダスンは常に自らの教養の無さを恥じ，知的好奇心を持った女性に惹かれるのである。
11） Hilbert H. Campbell and Charles E. Modlin (ed.) *Sherwood Anderson : Centennial Studies*, p. 68.
12） Hilbert H. Campbell and Charles E. Modlin (ed.) *Ibid.*, p. 70.

やされた。そのような状況下にあって，工場労働者たちの劣悪な生活環境に目が向けられ，共産主義者たちは新しい政府の樹立と生活改善を唱えた。

アンダスンは『ワインズバーグ物語』や『貧乏白人』において農業国から工業国へとアメリカが移行する過程を描き，機械には機能美があるとして機械文明を容認した。同時に自らも機械文明の証である自動車を愛し，山道を高速で運転することを好んだ[13]。だが，1930年代になると彼の機械に対する価値観は大きく変容する。その契機となったのが先に述べたダンビルでのストライキであった。1931年3月にはジョージア州の工場において労働者たちに向かって熱心に語りかけたり，稼働中の巨大な機械をじっと眺めたりして，工場労働者たちの抱えている問題を熟考した。その経験に基づき4月にシカゴ大学などで報道のあり方などに関する講演を幾度か行った。この講演が好評を博し，その後続々と講演依頼が舞い込んだ。

アンダスンは労働者たちに対する共感を講演という形で示すのか，あるいは執筆という形を取るべきか悩んだ末に[14]，最終的にダンビルでの労働争議と工場労働者を題材に長編小説を書こうと決意する。それこそが作家として生き残る最後の機会だと考えたからである。そのような過程で工場訪問を通じて認めた事実を短い随筆として纏めたのが『おそらく女性が』である。

アンダスンは小説の題材を繊維工場で働く労働者に求めたため，知らず知らずのうちに労働運動に加わり，共産主義者の中に名を連ねることともなった[15]。

13）アンダスンが自動車の運転をとても好んだことはエレナの次の言葉からも明らかである。He was passionately fond of driving his automobile. in *Sherwood Anderson : Centennial Studies,* p. 75.

14）アンダスンは当時の心境を兄のカール宛の手紙において明らかにしている。I have been avoiding people in New York because I do not want to get involved in a lot of social obligations, as right now I want to put all the energy I have into the work. (James Schevill, *Sherwood Anderson : His Life and Work,* p. 277)

15）エレナはアンダスンが共産主義者であったかという質問に対して次のように答えている。I got tired of people asking me whether Sherwood was a communist. To the best of my judgment, he was not. We know that he went to that world conference, which was semi-communist.

だが，彼は迷い続けていた。『おそらく女性が』の執筆にあたって，芸術作品に政治の諸問題を持ち込むことを拒否するのではなく，労働者の姿を描くことを通じてその劣悪な状況を読者に提示し，それによって一般大衆の眼を政治に向けさせようと方向転換を図ったのである。

したがって，この作品は工場労働者の姿をスケッチした随筆という形を取りながらも，過酷な労働状況の中で労働者たちの精神状況がいかに変化したかが描かれていると解せるのである。男性労働者と女性労働者の描写には明らかな差異が見られ，将来の産業主義社会の担い手として女性に大きな期待が寄せられた作品となっていると窺えるのである。

3. 挿絵が示すテーマ

アンダスンの多くの作品には，冒頭に挿絵が収められている。だが，『おそらく女性が』の表紙に描かれた木版画はとりわけ興味深いものである。なぜなら，この挿絵には作品のテーマが凝縮されていると窺えるゆえである。

町並みを背景にして男女がそれぞれ馬に乗って丘を登ってくる光景が描かれている。このふたりの表情と配置が重要である。女性が前方を見据えて先頭を進み，その背後に疲れた顔つきの男性を従えている。女性が乗った馬は顔立ちもよく，足並みも活力に満ち，前へ進もうと前足を高く上げて土を蹴っている。一方，男性の乗った馬は貧弱で頭を低くたれ，顔を横に向け，脚も地面から上げられずにたたずんだ姿である。女性は男性が乗った馬の手綱を引き，まるで放心状態にあるかのような男を導いて丘を登って前方に進もうとしている。空には暗雲が立ちこめているが，一部には光も漏れているようである。ふたりの

We know that he and Dreiser joked about being communists. また，エレナが共産主義者であったかという質問に答えて，自ら強く否定している。(*Sherwood Anderson : Centennial Studies*, p. 74.)

背景となっている町並みは繊維工場のようにも見てとれる。

この木版画は1920年代からアンダスンと知己のあったランクス（J.J. Lankes）の作品であり，アンダスンの依頼に基づいて製作されたものである。絵に描かれている男女から，先に述べたように，明らかな差異を見てとることができる。男性は精神的に衰弱し失意の中にあり，女性は活力を持って新たな世界の開拓をめざしているように窺える。男性をこのような肉体的かつ精神的に疲弊させる状況に追い込んだものは背景に広がっている繊維工場群であり，その中にひしめき合って設置されている巨大な機械類であろう。男性は機械文明に侵され失意の中にあり，女性は機械文明と別れを告げ，新たな世界の構築をめざして前進を重ねている。その道のりは，挿絵にあるように，上り坂を登るがごとく険しいものである。しかし女性は強い意志をもって前に進んでいる。現在は雲が低くたれ込めているが光もかすかに差し込んでおり，未来の世界があながち暗闇に包まれたものではないことを暗示している。生気に満ちた女性は男性の乗った馬の手綱を引くことによってひとりで新世界をめざすのではなく，男性を不毛な世界から救いだし力を合わせて新世界の構築にあたることを示している。その過程において女性は男性を見捨てるのではなく必要としていると窺えるのである。そこには互いの生殖活動を通して新たな生命を育もうという意思が表されている。したがって，この挿絵が象徴的に示しているものは新たな世界を築く主役は女性であり，その行為には男性にも重要な役割を期待されていると解釈できるのである。[16)]

16）タイラーもこの挿絵に関して，女性が自我を維持しているのに対して男性は機械に対して自我を放棄してしまっているようだと指摘している。This woodcut, which reflected the book's theme of woman's having retained selfhood while man has relinquished his to the machine, shows a strong female figure astride a handsome horse; she is leading a lowly nag, on which an insignificant man is riding. (Welford Dunaway Taylor, *Sherwood Anderson,* p. 227.)

4. 機械文明の本質

『おそらく女性が』において，アンダスンは機械のもつ魅力に関して次のように述べている。

It unwound thread from one sized ball and wound it onto another. The white balls of thread moved about, up and down along hallways of steel. They were moving at unbelievable speed. As the thread wound and unwound, the balls moving thus *gaily* along steel hallways, *dancing* there, being *playful* there, being touched here and there by *little steel hands* directing their course, so delicately *touched*....[17)]

アンダスンは工場に新しく導入された大型機械である Barber-Coleman Spooler を目の当たりにしてもあまり関心がわかなかったが，機械が動き出すのを見て驚愕する。多くの部品から成り立っている機械が，精巧な時計のごとく精密にバランスがとれて稼働しているのである。ひとつの糸玉からもうひとつの糸玉へと信じられないほどの早さで糸を巻いていくその動きには，華やかさ（gayly）やおどけたような（playful）ものがあり，まるでダンスをしているかのようである。また，部品同士は小さな機械の手（little steel hands）で触れあっているようであり，精密な接触（delicately touched）が行われているように見えるのであった。糸も彩り豊か（colorful）であり，糸玉がダンス（dancing balls）をしているがごとくであった。機械の動きは最初無秩序のように見えたが，巨大で美しい秩序があり計算されたダンス（every hop, every skip calcu-

17） Sherwood Anderson, *Perhaps Women,* p. 120. Italics are mine.

lated）のごとくであることが分かった。

アンダスンがとりわけ好む語句がこの描写には多くちりばめられている。gayly や playful などは『黒い笑い』においてポテントな黒人の描写に用いられている語であり，colorful は教会へ向かう黒人の衣装の描写で用いられ，自由な精神の象徴として使われている語である[18]。dance も黒人の荷揚げの動作に用いられており[19]，touch も caress などと同様に『黒い笑い』においてスポンジ・マーチンの愛情のこもった刷毛捌きを描く際に用いられている語である。このように工場に導入された新型の大型機械の動きを描写するにあたって肯定的な意味を持った語句を多く使用することによって，アンダスンが「巨大で美しい秩序」をもった機械を精神の自由を維持するために必要なものと見なしていると解せるのである。

機械の魅力は秩序だって稼働するところにあり，アンダスンにとって秩序（order）への執着はかなり早い時点から存在する。彼は米西戦争に出兵したときに目の当たりにした軍隊の残忍な集団リンチと群衆の卑しさを『行進する人びと』のモチーフにしたと言及した上で[20]，労働者が秩序を回復することによって精神的絆を確立する過程を作品として描いている。

冒頭で当時のシカゴの工場労働者が次のように描かれている。

There the disorder and aimlessness of our American lives becomes a crime

18）拙論「S. アンダスンの『物語作者の物語』一考察」京都学園大学経営学部論集第15巻第１号参照。

19）Sherwood Anderson, *Dark Laughter,* p. 68.

20）By that time I had become a writer. I had, after the war, been a factory man. I conceived of a figure, a man, a kind of combination of Abraham Lincoln and that later American figure, John Lewis. I conceived of such a man really inspired, a poet. He would be a poet of movement. I tried to create such a figure. I wrote a book, a novel I called *Marching Men.* What I wanted to do was to create a great epic poem of movement in masses. (Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs,* p. 171.)

for which men pay heavily. Losing step with one another, men lose also a sense of their own individuality so that a thousand of them may be driven in a disorderly mass in at the door of a Chicago factory morning after morning and year after year with never an epigram from the lips of one of them.[21)]

アメリカ人の「無秩序」で「目的のない」人生は人びとにとって厳しく背負わされた罪であり，足並みを揃えられないがゆえに個性も失われ，人びとはいっそう「無秩序な群衆」と化していると述べている。主人公のマクレガー少年には，人びとの人生が「混乱し無駄なもの」のように思える。工場労働者である男たちをこのような混乱状態に追い込んだのが工場の機械であると暗示するために，シカゴの工場の前で長年にわたって日々繰り返される情景をもとに男性労働者たちの精神的荒廃を象徴的に描いている。当時のシカゴの労働者やコール・クリークの炭坑夫に対して使われている形容詞は disorderly, disorganized, aimless であり，軍隊を形容する用語は trained orderly, shoulder to shoulder, uniform, march, parade などである。したがって，両者の間で全く対峙する語が用いられていることが分かる。[22)]

マクレガーが最初に眼にした行進は無秩序な炭坑夫たちのストを鎮圧した軍隊によるものである。この行進は混乱した世界を秩序立てる強さを示す形式美であった。次に眼にした炭坑夫たちの行進は命令を下す指導者もなく，精神的絆で母と結ばれた人びとが無意識のうちに一体となって歩調を合わせたもので，いわば形式美と実質美の統合されたものである。すなわち，アンダスンにとっ

---

21) Sherwood Anderson, *Marching Men,* p. 12 in Kichinosuke Ohashi (ed.) *The Complete Works of Sherwood Anderson II.*

22) Down the street came a file of soldiers with guns swung across their shoulders. Again Beaut was thrilled by the sight of trained *orderly* men moving along shoulder to shoulder. In the presence of these men the *disorganized* miners seemed pitifully weak and insignificant. Sherwood Anderson, *Ibid.,* p.49. Italics are mine.

て秩序とは深層でのコミュニケーションなのである。行進とは混乱した世界を真のコミュニケーションを通じて精神を秩序立てる手段であるのだ。アンダスンは「行進する人びと」(the Marching Men) と固有名詞を用いてその運動の目的が世界の再生と人びとの生活を意義深いものにすることにあったと述べている。[23] このように初期の作品である『行進する人びと』において，「訓練の欠如した無秩序で未組織」であることは罪深いものであるとして，アンダスンは秩序の重要性を主張しているのである。[24]

また，『貧乏白人』における田植機の発明は家族が農作業に携わる姿が「醜い不格好な動物」(grotesquely misshapen animals) のように見えたことから始まる。自動植え付け機の発明を通じて彼らを奴隷のような労働から解放すると同時に，農作業に秩序を生み出そうと考えたためである。アンダスンがその発明の動機を知性 (intelligence) 愛 (love) 理解 (understanding) と述べているのもそこに理由がある。

機械の秩序だった動きと同様のものが人間の手による労働，すなわち職人芸である。『ワインズバーグ物語』のウィング・ビドルボーム (Wing Biddlebaum) の手を見ても明らかなように，手はひとつの材料から新しい形を創造するための道具である。『黒い笑い』では，職人芸を持ったスポンジの刷毛捌きを「手による愛撫」と賞賛している。[25] 人間が意思の疎通をはかる道具であり，創造のための道具でもある手による労働を放棄し，機械に頼ったために「文明

---

23) ...the long purposeful march that was to be the beginning of the rebirth of the world and that was to fill with meaning the lives of men. (Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 162.)

24) They must march fear and disorder and purposelessness away. That must come first. と述べて，アンダスンは行進が恐怖，無秩序，目的欠如を葬り去る手段であると暗示している。(Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 150.)

25) A workman, like Sponge, saw felt tasted things through his fingers. There was a disease of life due to men getting away from their own hands, their own bodies too. (Sherwood Anderson, *Dark Laughter*, p. 98. in Kichinosuke Ohashi (ed.) *The Complete Works of Sherwood Anderson VI.*)

病」(disease of life) が生じたとアンダスンは述べている。職人芸こそが文明病から精神の健全さを守り，真の人間の在り方を示すものなのである。

このようにアンダスンにとって，機械はリズミカルに整然と動くことによりある種の秩序をこの世に生み出す存在なのである。ひとつの機械が生み出す秩序によって工場全体が組織化され，効率よくすべてのことが進展する。その意味では機械が世界を秩序立てていくのであるが，同時に人間の精神をも秩序立ててしまったのである。その一連の行為により，男性労働者たちは自らの手で独自のものを創作するすべを失い，自信を喪失し，存在意義をも失ってしまったのである。したがって，機械自体は人間の労働を軽減し，自由に空想できる時間を人間に与えるいわば善なるものであるが，機械によって生み出された産業主義社会は男性労働者たちを機械の奴隷と化し，自由や尊厳を奪う悪なるものであるとアンダスンがみなしているといえよう。秩序だった動きを示す機械に魅せられると同時に機械文明に脅威を感じるというアンダスンのジレンマが，機械を巧みに使いこなすことができる女性労働者に対する期待という形に変容していくのである。

5. 男性労働者

『おそらく女性が』における男性労働者たちの姿を追ってみることにする。

アンダスンは機械を製作する行為と小説を執筆する自らの営みを同じ目的を持つ務めとして捉え，無から有を生ずる崇高さを備えていると賞賛している。[26] 機械を生み出す人間は思考したものを形に現すことができる存在であり，科学者など機械を創造する人間の存在およびその仕事の意義を高く評価している。

だが，製作された機械を工場で実際に操作している労働者たちは次のように

26) Sherwood Anderson, *Perhaps Women,* pp. 45-46.

描かれている。

After all, the machine is only a tool, but for the present, at least, it is too *big,* too *efficient* for us. It plays the very devil with the man who works the machine. The man who works the machine feels too *small.* He is working all day and every day in the presence of something apparently stronger than himself, more efficient. It makes him feel *inferior.* His spirit gets tired. The spirit of the machine doesn't tired–it hasn't any.[27)]

もともと機械は人間の行為を補助するためのものであった。しかし，機械が巨大化し性能が高まり効率的になることにより，操作する労働者たちは無力化し，作業に追われることにより労働環境も悪化する。また，機械の存在は労働者たちを威圧し，多くの精神的な歪みを生み出すこととなった。アンダスンが機械を「悪魔」と呼んでいるのはそれゆえである。[28)]機械の前で日々働く男性労働者たちは機械を使うのではなく機械に使われるようになってしまった。その結果，肉体的な疲労だけでなく，自らの無能さを露見することになり，劣等感に苛まれ労働に対する自信や意欲を失ってしまったのである。[29)]機械製作者に対して healthy という形容詞を用いて精神的健全さを示す一方で，労働者たちの感情を示す語として inferior や tired などが用いられ，精神的に疲弊した姿を提示している。機械に対しても devil という語を用いて存在を否定している。このように男性労働者たちを機械文明に征服され，精神的自由や健全さを失っ

27）Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 46. Italics are mine.
28）ヘンリージェイムズがアメリカの成功を money and success as a bitch と称しているとアンダスンは言及している。（Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 77.）
29）アンダスンは機械文明の不条理に翻弄される自らの姿をチャップリンと重ね合わせている。Himself also trying to put up a bold front to the world. Myself, in my own consciousness, that night become a kind of Chaplin.（Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 96.）

た人間であると言及することにより，将来を託せる存在ではないことを暗示しているのである。

男性労働者の退廃の原因は機械の性能が高まったことだけによるものではない。彼らの思考方法にも大きな問題があるとアンダスンは指摘している。綿織物工場の様子を，「工場の一方から綿花が運び込まれ，他方から出るときには布に織られており，その間に人間の手は一切介在しない[30]」と述べて，産業主義社会の象徴である工場には人間の手労働が介在する余地のないことを示している[31]。男性労働者たちは産業主義が発展する以前から2つのものに忠誠を誓ってきた。迅速かつ低コストの生産ラインと販売促進のための広告である。その結果労働の効率化による雇用機会の喪失と均一的で無価値な商品の過剰な生産が生じ，実質を伴わない商品が広告によって大量販売されることとなった。人びとは雇用不安にもさらされ，創意工夫された商品を生み出す情熱を失うこととなった。アンダスンにとって機械文明とは男性労働者たちの尊厳を失墜させ，社会生活における精神的自由を剝奪するものであったのである。

男性労働者がこの病にかかったもうひとつの病巣は権力への執着である。アンダスンがある抜け目のない有能な工場管理者に対して，「権力に対する欲望は病であり，人が前進するためのすべての試みを破壊し，人びとは人生の現実に直面せず，死んだ時代である」と語りかける[32]。産業主義社会の成功者たちは自己の財産確保を優先し，新たなことをはじめる人生を拒絶し，ものを所有することによって安定した壁の内側で暮らそうとするのである。男性たちは貧富の差によって大きく二極化され，豊かになった成功者たちは権力に固執して保

30） Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 69.
31） アンダスンは工場を巨大な刑務所（a vast prison）にたとえている。Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 90.
32） New men in power. Power, the desire for power, is a disease. It destroys every attempt men make to advance. It is a dead time. Men are standing still. They dare not face the realities of life. (Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 66.)

守的になり，貧しい労働者たちは機械に使われ雇用確保と日々の労働に追われ，いずれも精神の自由を失ってしまったのである。

この作品においても，『黒い笑い』と同様に，インポテントというキーワードを用いて労働者たちの荒廃した精神状況を暗示している。アンダスンは工場で見かけた労働者たちを，経験豊かなアメリカ人たちとは恐ろしいまでの隔たりがあり，「個人的な感情を交えることなく，心の奥深くに敗北感を抱き，たるんだ口そして死んだような目をしている[33]」と描いている。機械が「新しい神」(new god) となって人びとの間に「壁」(wall) を築き，深層部分でのコミュニケーションを断ち切り信頼関係を崩壊させてしまったのである。その結果，男たちは肉体的かつ精神的インポテントな人間となってしまったと解せるのである。

6. 女性労働者

アンダスンは1929年の冬に女性やアメリカにおける近代産業の到来について考えながら街を歩いていた。「変化の時代」(a time of change) という言葉が頭の中で何度も繰り返され，歌のようなリズムを持った。人びとはこの変化を「進歩」(progress) と呼んでいたが，アンダスンは時代が男性と女性に異なったものをもたらしたと考える。

The real problem of what the machines are doing to men hasn't begun to be touched yet. But what about the women? Why are they more triumphant than the men in such an age? Perhaps they aren't. It may be they only seem to be less touched.[34]

33) Sherwood Anderson, *Ibid.*, pp. 101-102.
34) Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 47.

機械が男性労働者に与える真の問題は未だ顕在化していないが，まもなく多くの男性労働者たちが精神的にインポテントな人間へと変質すると予言している。それに対して女性労働者たちは機械に支配された時代にあっても男性労働者たちよりはるかに勝ち誇った姿を呈している。女性労働者たちは男性のように機械に支配されることがないのである。男性が金を稼ぐことを人生の目的としているのに対して，女性はそれを消費することで物質文明を享受している。女性は男性に比べて実際的であり，欲するものを手に入れたいという願望を強く持っており，機械に支配されることなく産業主義機械文明が生み出す大量消費の時代を楽しむことができる存在なのである。ここに男性労働者と女性労働者の差異を認めることができる。

アンダスンは機械文明に打ち勝つことができる要因はセックスにあるとみなす。「セックスなしでは人生の4分の3の魅力を失ってしまうことになる。もし機械が人間の生活を支配し続けるならば，男らしさを手放してしまうことになるであろう[35]」と語り，人びとの運命を握るのはセックスの喜びを享受できるかどうかという点にあると暗示している。セックスの大切さはすでに『黒い笑い』において大きなテーマとして扱われており，セックスを通じて人間は真のコミュニケーションを行えるとアンダスンは主張している。したがって，インポテントな男性ではなく，女性こそが将来を託すべき存在であると考えられるのである。

機械の前でインポテントな人間となってしまった男性を目の当たりにして，女性には大胆で挑戦的であって欲しいと願い，次のよう述べている。

I am asking for a statement of the inner strength, of the living potence of

35) Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 58.

present-day American women, of their hunger, the potentiality of new strength in them, that may save American civilization in the very face of the machine.[36)]

アンダスンは機械文明が進むアメリカ社会にあって，今もなお生命力を有し，物事に対して熱意をもち，新しい強さを秘めた女性だけが機械を恐れることなくアメリカ社会を救えるのだと断言している。このように，インポテントな人間となったアメリカの現代男性たちと潜在的可能性を秘めたポテントな存在である女性を対比させることにより，産業主義社会がもたらした当時の人びとへの影響の明暗を暗示していると窺える。

工場を訪れたアンダスンは働く女性に強い関心を寄せていたある女性から嘲笑（laughter）される。女性によると，現代のアメリカ男性の特徴は臆病であり，繊細な感受性を持った男はひとりもいないとのことであった。だが，彼女はセックスの問題を解決できれば，すべての問題を解決できると言う。セックスにはすべてのものに活力を与える力があると述べる。インポテントとなった男性はセックスを通じた肉体によるコミュニケーション能力を失った存在であるだけでなく，子孫繁栄によって新たな世界を構築する可能性をも失った存在なのである。アンダスンは女性の受胎能力を「隠れた内面の生命力」（inner life）と呼び，子孫を生み出すことによって産業主義社会の中で機械に支配されない社会を生み出すことができると信ずるのである。[37)] 女性の役割は機械を制御することにより男性がインポテントになることを防ぎ，セックスというコミュニケーション手段を通じて新たな世代を生みだし，人間を中心とした新しい世界を構築することなのである。『おそらく女性が』というタイトルの背後に

36）Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 97.
37）Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 140.

は「おそらく女性が世界を救う」というメッセージが込められているのではないであろうか。そのように読み解くと，このエッセイで描かれている女性への期待が理解できるのである。

だが，セックスは基本的に異性との行為であり，男性がインポテントになっていく中でいかにセックスというコミュニケーション行為を維持することができるのであろうか。ここに将来を女性に託すとしながらも，この発想には大きな不安を覚えることにもなる。

7. 幸 福 論

アンダスンはこれまで訪れた工場や事務所で，男性の中では死んでしまった何ものかが女性の中ではまだ生きていると感じてきた[38]。工場，会社，そして商店でも女性たちは今もなお生きている。女性たちは機械が人間の身代わりとなって働くことによって生み出されるパワーを受け入れず，それを自らのパワーに変えて自由な精神を守っているのだ[39]。女性の力は人間関係を築くためのものであり，直接人びとに作用するものである。それは機械が与えることのできない力である。『キッド・ブランドン』において車を駆り立てる女性が描かれているのは，女性が機械を征服したことを暗示しているのである。

『おそらく女性が』の最終章「真夜中の叫び」において，女性の嘲笑が象徴的に扱われている。工場の暗闇から機械の叫び声が聞こえてくる。女性のヒステリックな笑い声（laughter），それも若い女性の笑い声で「私にキスして」と叫ぶのである。それに対して男性たちが疲れた声で「私に言っているのか」と

38) As in every mill into which I had gone, in every large office where both men and women are employed, I have sensed something still alive in the women that seems to me going dead in the men. (Sherwood Anderson, *Ibid.*, p142.)

39) The women in the factories, in the offices, and the shops are still alive. They are not enervated spiritually by the machines. They have not accepted the vicarious feeling of power, got from machines, as their own power. (Sherwood Anderson, *Ibid.*, p. 142.)

尋ねるのである。だが女性は「あなたたちではない」ときっぱりと否定する。

It began with a woman's voice. She laughed hysterically, I thought. It was a young girl's laughter. "Kiss me," she cried. Was she calling to the machines? Machines do not kiss. She laughed again. "Kiss me while the lights are out," the voice said. A male voice from far across the room answered, wearily I thought. The male voice was not much. "Who? Me?" it asked, wearily. "No, not you." There was a little chorus of male voices. "Me?" "Me?" "Me?" "Me?"(hopefully) "No, not you. None of you." "I want a man," the girl's voice said. It was a clear young voice. There was an outburst of laughter from many women — ironic laughter it was, down there in the darkness — and then the lights came on again.... "The women often do that sort of thing," the young mill superintendent afterward said to me. "Why?" "Oh, they are making fun of the men," he said coldly enough.[40)]

暗闇の中から叫び声が谺する描写は『黒い笑い』のラストシーンと酷似している。『黒い笑い』ではアリーンとスポンジが黒人女たちの「黒い笑い」によって不毛な世界から旅立つ情景が描かれ，インポテントであるフレッドはその笑い声に自分の不毛な内面を見透かされたように感じて怯える。『黒い笑い』では男性たちの精神的不毛を見抜くのが黒人女性たちだけであるが，『おそらく女性が』においては白人女性たちも男性たちの精神的，肉体的不毛を見抜くのである。産業優先主義の趨勢はより加速度を増し，男性たちは機械文明の中で自らの精神世界を売り渡し，すべてのものを失ってしまった。それが黒人女

40）Sherwood Anderson, *Ibid.*, pp. 143-144.

性たちだけでなく，誰の目にも明らかとなったのである。一方，本来なら男性よりも肉体的に力が劣る存在である女性たちが機械を利用することによって男性たちよりも力強く生き，精神世界を広げ，男性たちを嘲笑するのである。そこには『黒い笑い』におけるスポンジ・マーティンのような男はもはや存在せず，若い女性たちがそれに成り代わっているのである。この描写には女性に対する期待と男性に対する失望が色濃く表されているといえよう。

『おそらく女性が』においても暗闇の中から女性の嘲笑が響き渡るが，今回は言葉を発して「私にキスして」と叫ぶのである。もちろん機械がキスをすることは物理的に不可能であり，周りの疲れた男性たちからの申し出もすげなく断る。では，この「キスして」という言葉は誰に対して発せられたものであるのか。その言葉につづいて，「私は男が欲しいの」と若い女性は明確に述べる。多くの若い女性たちから「爆発的な嘲笑」(outburst of laughter) がわき起こる。それは暗闇からの「皮肉に満ちた笑い」(ironic laughter) であった。その後明かりが点るとすべてが通常の現実に戻った。工場の現場監督に理由を尋ねると，「女性は男性をからかっているのさ」と冷ややかに応じ，女性たちがしばしばそのような行動をとるとのことであった。

工場の明かりが突然消えて生み出された暗闇の世界と，光に満たされた世界が対比されて描かれている。後者の世界は現実の世界であるが，実は表面を装った虚偽の世界なのである。そこでは工場主の下で管理された機械と男女労働者が表面を繕った状態で同居して黙々と働いている。だが，いったん暗闇の世界に転じるとそれまで心の奥深くに閉じこめられていた人間の本質が表に現れる。疲弊した男性たちや電気が止まることによって無力となった機械類の中にあって，女性たちからキスの対象を求める声が明確に発せられる。だが，肉体的疲労が蓄積し精神的に不毛となった男性たちがその対象ではない。ここで作者であるアンダスンが突然顔を出し，「その叫び声は機械に向けられているの

だろうか。機械はキスなどしないのに」と語っていることは注目すべきことである。女性労働者たちの嘲笑は明らかに機械に向けられており，機械に未だ支配されていないことを暗示していると考えるべきである。そのため機械によって不毛にされた男性労働者たちの声に耳を貸さず，ただ「男が欲しい」ということによって自分たちを完全に機械から自由にしてくれるものを求めたと見なすべきであろう。この「キスして」という言葉に込められた嘲笑は産業主義文明の結果として現れた無気力な男性労働者に対するものではなく，その根源である機械文明に対するものであるのだ。

アメリカの祖先の人びとは人間の権利に関して雄弁に語り，めざすものは「生命，自由そして幸福の追求」であったとアンダスンは述べている[41]。『おそらく女性が』の執筆を通じて工場で働く男性と女性を観察することによって，女性こそが生命，自由そして幸福の追求が可能な存在であると確信し，将来の希望を託すべきは女性であるという結論に到達したといえるのである。アンダスンにとって幸福とは，精神の自由を維持し，新たな生命を生み出す精神的コミュニケーションが円滑にはかられる世界が確保されることであると結論づけることができるのではないであろうか。

おわりに

アンダスンにとって機械の発明とは，過酷な労働を軽減し労働時間を短縮することにより空想の時間を生みだし，精神の健全性を保つためのものであった。だが，機械の発達は労働者に単純労働を強いることになり，その高度化は迅速で効率の良い作業を要求する労働環境を生み出す結果となった。また，機械によって生産された標準的な商品が大量に市場に氾濫し，標準化に基づく機械文

41）Life, liberty and the pursuit of happiness. We pursued the twin bitches, money and success. There is no happiness on that road. (Sherwood Anderson, *Ibid.*, pp. 85.)

明を誕生させることともなった。そのような状況にあって，機械に支配された工場労働者たちは，創意工夫や手労働による巧みな技を駆使する機会を奪われ極度の肉体的疲労を覚え，自尊心を失ってしまう。機械文明の恩恵にあずかって権力や富を獲得した一部の男たちも自らの財産を守るために保守傾向を強め，新たなものを生み出す力を喪失してしまう。したがって機械の発明によって生み出された産業主義社会にあって，繁栄に浴して財産を獲得した資産家たちも，過酷な労働環境におかれた男性労働者たちも，新たな世界を創出する精神の自由を奪われ精神的に不毛なインポテントな人間となってしまったのである。

男性労働者たちと対比して描かれているのが，肉体的に非力であるがゆえに工場労働から排斥されていた女性たちである。彼女たちは補助具として機械を利用することにより工場労働に携わり，非力であるがゆえに機械に使われることなく，機械を巧みに操ることによってこれまで内に秘めていた力を外に表すことに成功する。女性たちは物質文明を享受して男性たちよりも力強く生きて精神世界を広げる一方で，男性たちの精神世界の不毛を見抜いて嘲笑するのである。

アンダスンが理想としたのは生命，自由そして幸福を追求できる世界であった。女性たちの「隠れた内面の生命力」である受胎能力には，産業主義社会の中で機械に支配されない世界を生み出す力があると信ずるのである。女性の役割は機械を制御することにより，男性たちの精神世界を健全に保ち，セックスというコミュニケーション手段を通じて子孫繁栄を促して，人間を中心とした新たな世界を構築することなのである。

『おそらく女性が』というタイトルには，産業主義の進展に伴い荒廃していくアメリカ社会を「おそらく女性が救済する」というアンダスンのメッセージが秘められていると結論づけることができよう。そのように読み解くと，このエッセイで描かれている女性への期待が理解できるのである。

参考文献

1. Ohashi, Kichinosuke, (ed.) *The Complete Works of Sherwood Anderson.* Kyoto : Rinsen Book Co., 1982.
2. Anderson, David D. *Sherwood Anderson.* New York : Holt Rinehart and Winston, Inc., 1961.
3. _____ . (ed.) *Sherwood Anderson : Dimensions of His Literary Art — Collection of Critical Essays* — Michigan. Michigan State University Press, 1976.
4. Appel, Paul P. (ed.) *Homage to Sherwood Anderson.* New York : Paul P. Appel, Publisher, 1970.
5. Barbank, Rex. *Sherwood Anderson.* New Haven : Twayne Publishers, 1964.
6. Campbel, Hiltert H. & Modlin, Charles E. *Sherwood Anderson : Centenial Studies.* Troy : Whitston Publishing Company, 1976.
7. Chase, Cleveland B., *Sherwood Anderson.* New York : Haskell House Publishers Ltd., 1972.
8. Duffey, Bernard. *The Chicago Renaissance in American Letters : A Critical History.* Westport : Greenwood Press, Publishers, 1954.
9. Elias, Robert H. (ed.). *Letters of Theodore Dreiser.* Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1959.
10. Howard, June. *Form and History in American Literary Naturalism.* Chapel Hill and London : The University of North Carolina Pres, 1985.
11. Howe, Irving. *Sherwood Anderson.* Stanford, California : Stanford University Press, 1968.
12. Jones, Howard Mumford (ed.). *Letters of Sherwood Anderson,* Boston : Little, Brown and Company, 1969.
13. Modlin, Charles E. (ed.). *Sherwood Anderson : Selected Letters.* Knoxville : The University of Tennessee Press, 1983.
14. Papinchak, Robert Allen. *Sherwood Anderson : A Study of the Short Fiction,* New York : Twayne Publishers, 1992.
15. Rideout, Walter B. (ed.) *Sherwood Anderson : A Collection of Critical Essays.* Englewood Cliffs : Prentice-Hall, Inc., 1974.
16. Rogers, Doublas G. *Sherwood Anderson : A Selective, Annotated Bibliography.* Metuchen : The Scarecrow Press, Inc., 1976.
17. Scheville, James. *Sherwood Anderson : His Life and Work,* Denver : The University of Denver Press, 1951.

18. Sheehy, Eugene P. & Lohf, Kenneth A. *Sherwood Anderson : A Bibliography.* Los Gatos, California : The Taliman Press, 1960.
19. Taylor, Welford Dunaway. *Sherwood Anderson.* New York : Frederick Ungar Publishing Co., 1977.
20. Townsend, Kim. *Sherwood Anderson,* Bosom : Houghton Mifflin Company, 1987.
21. Weber, Brom. *Sherwood Anderson.* Minneapolis : University of Minnesota Press, 1964.
22. White, Ray Lewis. *Sherwood Anderson : A Reference Guide,* Boston : C. K. Hall & Co., 1977.
23. _____ . *Sherwood Anderson's Memoirs : A Critical Edition.* Chapel Hill : The University of North California Press, 1969.
24. _____ . (ed.) *The Achievement of Sherwood Anderson : Essays in Criticism.* Chapel Hill : The University of North California Press, 1966.